

病防第73号
平成30年9月25日

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

ナシ黒星病の秋期防除対策（技術情報第7号）について（送付）

来春の黒星病の発生を予防するため、秋期防除等の対策について取りまとめましたので、ご活用下さい。

記

本年の黒星病の発生は平年並ですが、来春の感染予防のため、秋期防除を徹底し、越冬伝染源を無くしましょう。

1 発生状況

- 1) 本年のナシ黒星病の巡回調査における発生量は、調査期間を通じて平年並で推移した(図1)。
- 2) 防除員報告では、一部の地域で6月の梅雨入り後に、発生量が平年より多い地域が見られたが、栽培期間を通じて、概ね平年並～やや少の発生量で推移した。
- 3) 福岡管区気象台が9月20日に発表した九州北部地方1か月予報によると、降水量は平年並～多で、黒星病の感染に適している。

2 防除対策

黒星病は秋期の降雨によって葉やりん片に感染する。葉の裏面や葉柄では薄いスス状の秋型病斑(図2)を生じ、子のう殻を形成し越冬する。また、りん片基部に感染した場合は、そのまま基部組織内で越冬する。感染したりん片や落葉が、翌春の第一次伝染源となり、葉や果実に感染する。

黒星病の発生については、8月の発病葉率が高いと、翌年5～6月の平均発病葉率も高くなる傾向が見られる(図2)。

本年は、平年並の発生だが、翌春の発病葉率をさらに抑えるために、以下の秋期防除等の対策を徹底する。

- 1) 葉およびりん片への感染を防ぐため、収穫後から落葉期(～11月中旬)に2～3回の薬剤防除を行う(防除の詳細は、[平成23年5月付け農業研究成果情報 No. 515](#)を参照する。)
- 2) 薬剤は、散布ムラのないよう園地の隅々までていねいに散布する。
- 3) 園内の落葉は、越冬伝染源となるため、園外へ持ち出して処分する。
- 4) 秋期防除は、DMI剤に対する薬剤感受性の低下を防ぐため、保護殺菌剤を使用する。
また、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

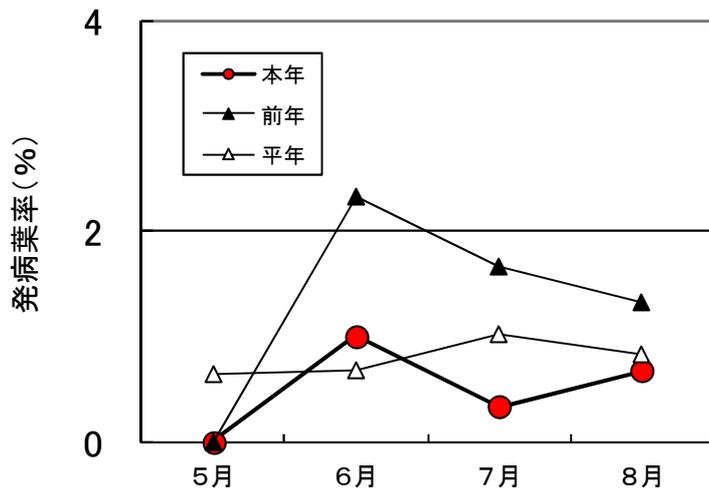


図1 黒星病発病葉率の推移

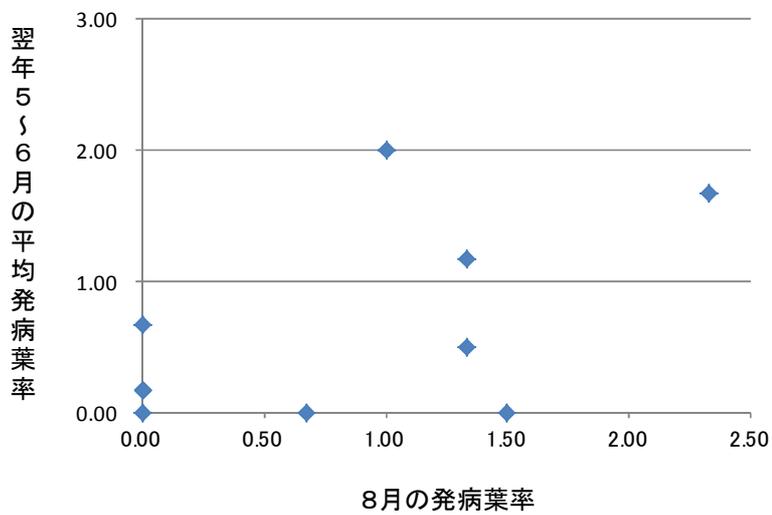


図2 黒星病の8月と翌年5～6月の平均発病葉率の関係(過去10年間)

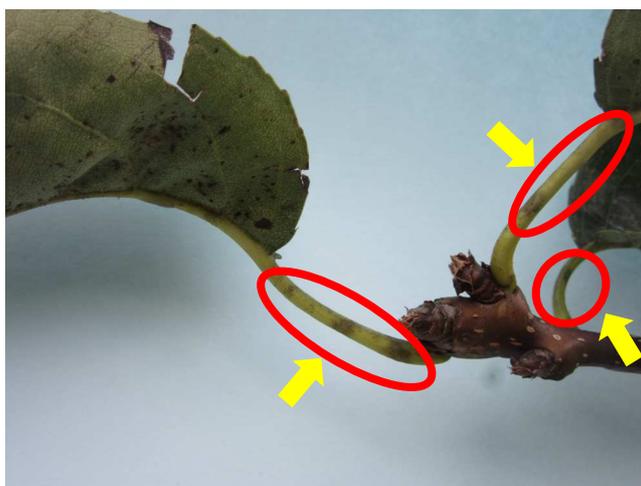


図3 葉の裏面や葉柄に形成された秋型病斑